

昭和四十九年

日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和四十九年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。
一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものを適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道徳教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分列配列した。

単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

日本思想史の課題と方法	守本 順一郎	新日本出版社
日本思想史(上)	〃	〃
日本精神史の課題	宮川 透	紀伊国屋書店
日本人と思想	山 県 三千雄	創 文 社
日本思想史の基礎知識 古代から明治維新まで	田 村 円澄等編	有 斐 閣
日本の求道心	古 川 哲 史	理 想 社
日本宗教の構造	宮 家 準	慶 応 通 信
日本のシャマニズム上	桜 井 徳太郎	吉川弘文館
神道の思想	1 神道思想篇 2 神道制度篇 3 神社研究篇	梅 田 義 彦 雄山閣出版
八坂神社の研究	久保田 収	神道史学会
本 地 垂 迹	村 山 修 一	吉川弘文館
日本における政治と宗教	笠原 一 男編	〃

古 代

聖徳太子と日本文化	四天王寺編	春秋社
古代史発掘 ³	江坂 輝 弥・磨編	講 談 社
土偶芸術と信仰―縄文時代 ²	野口 義 磨編	講 談 社
日本古代呪術	吉野 裕 子	大和書房
日本仏教思想論上	玉城 康四郎	平楽寺書店

鑑 真 ―その戒律思想―	石田 瑞 磨	大蔵出版
平安浄土教信仰史の研究	伊 藤 真 徹	平楽寺書店
神道考古学講座 ⁴ 歴史神道期	大場 磐 雄編	雄山閣出版
古代伝承と宮廷祭祀	松 前 健	塙 書 房
日本神話の比較研究	大 林 太 良編	法政大学出版局
日本神話の基盤 風土記の神々と神話文学	三 谷 栄 一	塙 書 房
日本神話と印欧神話 構造的分析の試み	吉 田 敦 彦	弘 文 堂
ギリシヤ神話と日本神話	〃	みすず書房
出雲国風土記の神話	佐 藤 四 信	笠 間 書 院

中 世	中世日本の精神史的景観 末法と末世の思想 浄土教思想編 法然上人の伝記と思想 法然浄土教の思想と歴史 道元の言語宇宙 中世法華仏教の展開 明 恵 上 人 続中世文学の思想	桜井 好 朗 塙 書 房 小 沢 富 夫 雄山閣出版 服 部 英 淳 山喜房仏書林 恵 谷 隆 戒編 隆 文 館 香 月 乘 光 山喜房仏書林 寺 田 透 岩 沼 書 店 影 山 堯 雄 平楽寺書店 白 洲 正 子 新 潮 社 小 林 智 昭 笠 間 書 院
-----	---	--

近世

近世伝統文化論	林屋辰三郎	創元社
シンポジウム日本の歴史12 近代思想の源流	高橋 磯一他	学生社
民衆史の創造	芳賀 登	日本放送出版協会
中江藤樹	渡部 武	清水書院
安藤昌益	八戸市立図書館編	伊吉書院
頼山陽	野口武彦	淡交社
近世日本哲学史	麻生 義輝	宗高書房
近世史学思想史研究	小沢 栄一	吉川弘文館
近世国学の文学研究	重松 信弘	風間書房
日本科学史散步 江戸期の科学者たち	大矢 真一	中央公論社
近世伊勢における 本草学者の研究	松島 博	講談社
日本洋学史の研究Ⅲ	有坂 隆道編	創元社
日本自然誌の成立 蘭学と本草学	木村 陽二郎	中央公論社
武士道論考	古賀 斌	島津書房
紀州の藩学	松下 忠	鳳出版
近代日本の光源 —鳴滝塾の悲劇と展開—	久光 康生	木耳社
近世の地下信仰	片岡 弥吉	評論社
キリシタンと鎖国	小室 純子	評論社
	助野 健太郎	桜楓社
	村田 安穂	桜楓社

近代

上田秋成の万葉学	新藤 知義	桜楓社
良寛の思想と精神風土	長谷川 洋三	早稲田大学出版部
日本近代思想の形成	植手 通有	岩波書店
近代化の精神構造	神島 二郎編	評論社
日本の近代化と民衆思想	安丸 良夫	青木書店
近代日本の知的状況	松本 三之介	中央公論社
大正デモクラシー	松尾 尊允	岩波書店
大正デモクラシー論	三谷 太郎	中央公論社
思想史としての現代	住谷 一彦	筑摩書房
アメリカ精神と近代日本 —森有礼から三島由紀夫まで—	佐渡谷 重信	弘文堂
福沢諭吉	会田 倉吉	吉川弘文館
津田左右吉	上田 正昭編	三一書房
柳田国男の思想(新版)	中村 哲	法政大学出版局
狩野亨吉の生涯	青江 舜二郎	明治書院
田辺元の思想史的研究	家永 三郎	法政大学出版局
批判近代日本史学思想史	芳賀 登	柏書房
日本唯物論史	笠井 忠	汐文社
ほんみち不敬事件 —天皇制と対決した民衆宗教—	村上 重良	講談社
明治維新草莽運動史	高木 俊輔	勁草書房
政教社の人びと	都築 七郎	行政通信社
佐久自由民権運動史	上原 邦一	三一書房

秩父風 秩父事件と井上伝蔵 ある社会主義者の一生 前田隆雄評伝	小池喜孝	現代史出版会
「天皇制」論集	日下次郎	三一書房
北一輝と超国家主義	久野二郎編 神島二一郎編	〃
	岩波昌登	雄山閣出版

II 雑誌・紀要論文目録

総 雑

津田博士の思想史における 「人」の問題	栗田直躬	日本思想史学六
和辻哲郎の日本思想史研究 ―方法とそのエートス―	湯浅泰雄	〃
村岡典嗣教授における思想史 の方法 ―特に価値観と歴史叙述の ―関連について―	梅沢伊勢三	〃
和辻哲郎における倫理と文化 ―「日本倫理想史」批判 のために―	嶋田鋭二	科学と思想一四
前近代思想史研究の課題と 方法 ―覚え書 その一―	奈倉哲三	民衆史研究一二
民衆思想史の方法と課題	対談 色川大吉 布川清司	思想の科学三一
日本仏教とその諸問題 ―現代キリスト教神学の 方法に照らして―	小幡義信	カトリック研究 二六
日本の思想と文化	対談 古藤由重 加藤周一	科学と思想一四
「日本文化論」の思想構造	土方和雄	〃
日本人の無神論の一形態 ―日本の思想背景から―	宗正孝	世紀二九二
義理と人情	沼田健哉	社会学評論 二五―一
戦後日本思想史研究文献目録	谷沢永一	国文学(関西大) 五〇
日本人の法則観 ―天文暦学の場合―	中山茂	思想五九八
医者の発想 ―日本人の法則観―	〃	〃 六〇三
文化変容に関する一考察 ―シナ天台宗と日本天台宗 との仏陀観を通じて―	由木義文 仲康	哲学(三田哲学 会)六二
日本の宗教的「道」の神学的 意義	J・G・ヴァレス 村上光子訳	清泉女子大学紀 要二二
本地垂迹説の日本的経緯 ―思想の重層性を 課題として―	高橋昊	日本大学精神文 化研究所・日本 大学教育制度研 究所紀要 六
日本仏教における平等思想の 展開	汲野泰昭 小野克夫	大阪教育大学紀 要(4・教育科 学)二二
日本唯識における四分義の 展開	太田久紀	南都仏教 三〇

日本における地藏信仰

日野西 真定

仏教芸術 九七

中部山岳地帯の真宗

千葉 乗隆・他
(共同研究)

竜谷大学仏教文化研究所紀要 一三

パウロと蓮如

田 辺 正 英

新潟大学教育学部紀要(一)・文学・社会科学編) 一五

キリスト教神秘主義と禪
—人格神と無についての—
—考察—

関 岡 一 成

関西外国語大学研究論集 二一

最近の日本基督教史関係著作の概観

大 内 三 郎

神学年報七四年

両墓性習俗の思想系譜を探る
—その思想的・文化的
—文化圏的研究への序論—

伊 藤 宏

哲学と教育一九

宿神論—上—芸能神信仰の
—根源に在るもの—

服 部 幸 雄

文学四二—一〇

日本民間信仰とその構造

波 平 恵 美 子

民族学研究 三八—三・四

日本の「家」とその信仰

竹 田 聴 洲

社会科学五—一

都市における家の宗教の変容

川 崎 恵 璋

竜谷大学仏教文化研究所紀要 一三

日本文学史序説三七—五〇

加 藤 周 一

朝日ジャーナル 一六—一五—一八
一〇—一一—一二
一一—一二—一三
一二—一三—一四
一三—一四—一五
一四—一五—一六
一五—一六—一七
一六—一七—一八
一七—一八—一九
一八—一九—二〇
一九—二〇—二一
二〇—二一—二二
二一—二二—二三

文芸理論における花実論—1—
—心詞論と虚実論の関連にお
—いて

実 方 清

日本文芸研究 二六—三

仏教と革命思想

しまね きよし

新日本文学 二九—四

思想史研究における分析的
—方法—
—松沢弘陽「日本社会主義
—の思想」に触発されて

飛鳥井 雅 道

思想 五九八

結合原理としてのアジア的思
—惟とその再出をめぐる
—守本順一郎「日本思想史
—の課題と方法」および
—「東洋政治思想史研究」
—をよむ

鈴 木 正

思想の科学 三九(別冊九)

丸山真男「歴史意識の古層」
—をめぐって

田 中 収

科学と思想 一三

大野達之助著「新稿日本仏教
—思想史」

多 賀 宗 隼

駒沢史学 二一

林屋辰三郎(他)「古代中世
—芸術論」

福 田 秀 一

芸能史研究四五

古 代

日本古代思想史の問題点
—思想傾向の歴史的
—の多元性・累積性への
—視覚—

西 田 照 見

立正大学哲学・
—心理学会紀要四

蘇我氏と息長氏の修史事業

『新日本書紀』上宮系譜の「凡牟都希王」をめぐる

永井紀代子 日本史論叢 四

『上宮聖徳法王帝説』管見

田中嗣人 文化史学 三〇

「上宮聖徳太子伝補闕記」の文化史的意義

新川登紀男 南都仏教 三三

聖徳太子「勝鬘經義疏」における善の思想をめぐる

梶村昇 亜細亜大教養部紀要 九

日本靈異記における因果応報思想

白土わか 仏教学セミナー 二〇

「日本靈異記」における罪惡観

広川勝美 人文科学 二二

聖徳太子の教育思想

藤謙敬 新潟大教育学部長岡分校研究紀要 二〇

最澄とその門流の教育

齊藤昭俊 智山学報 二二・二四

狭衣と源氏における教育観

土岐武治 花園大学研究紀要 五

古代人の他界観(一)

山田敏夫 びぞん通信 二六

日本神話の構造

大林太良 国学院大学日本文化研究所紀要 三四

神話と平均的日本人の宗教意識

川副武胤 金沢文庫研究 二〇

天つ神と国つ神の構成

重松明久 アジア文化 一〇—四

宇宙創造神話のモチーフに於ける日中神話

『古事記』の開闢説

『古事記』神代七代の神話の意味

古事記における神の不死と死(上)(承前)

「古事記」神生み段の左註「神参拾伍神」について

記紀神話解釈の一つのころみ

(中の二)「神」を再検討する

(下)「神」概念を疑う立場から

続篇「日出処天子」について

大ヒルメ、高ミムスビ神格私論

出雲国風土記にみえる日の神信仰と天つ神信仰

渡来神と地主神

養老神祇令の齋戒規定

やすらい祭の成立

保元新制の歴史的位位置を明確にするために

伊勢神宮創始についての一試論

神宮の式年遷宮制の成立と神祇信仰

鉄井慶紀 アジア文化 一〇—四

広畑輔雄 古代文化 二六—四

夜久平雄 神道学 八二

川副武胤 〃 八一・八二

野口武司 芸林 二五—四

溝口睦子 文学 四二—二・四

吉田重成 神道宗教 七二

加藤義成 神道学 八一

岡田莊司 〃 七九

梅田義彦 神道宗教 七二

河音能平 日本史研究 一三八

鎌田純一 古代文化 二六—一一

西山徳 皇学館論叢 六一—六

伊勢神宮考—日本に生きる中国の哲理 吉野裕子 民族学研究 三九—三

我国古代における呪的行為の二、三について 福島秋穂 国文学研究五二

法師、陰陽師のおこなう祓について—その雑乱性と本質の移行 岩佐貫三 東洋学研究 八

律令と仏教 井上光貞 仏教史研究 八

古代仏教思想史研究—日本古代に於ける律令 二葉憲香 竜谷大学論集 四〇—四

古代における民衆と仏教—民衆仏教の一断面— 上田信一 仏教史研究 七

聖徳太子の「勝鬘經義疏」と照法師撰「勝鬘經疏」との関連について 金治勇 四天王寺女子短大研究紀要 XVI

仏教大師最澄と「唐制」 木内史 宗教研究 四七—四

最澄における華嚴思想の影響—特に守護国界章を通して— 由木義文 南都仏教 三二

伝法大師教学と「釈摩訶衍論」 古田宏哲 智山学報 二三・二四

弘法大師における經典解釈の根拠 佐藤隆賢 //

弘法大師と伝法灌頂—特に夏雅僧正への付法について— 布施浄慧 //

徳一の華嚴一乘義批判 田村晃祐 東洋大学紀要(文学部篇)二七

「叡山大師伝」における二、三の問題点 牛馬真玄 南都仏教 三〇

空也の念仏 波多正文 仏教史研究 七

仏教説話集における神の説話の意義—日本靈異記上巻第一話— 久保田実 駒沢国文 一一

「往生要集」における業思想 坂東性純 仏教学セミナー 二〇

宣命の発展と衰退—日本における散文の成立と大陸思想— 上— 松本雅明 法文論叢 三三

大伴旅人における中国的志向² 石田公道 北海道教育大学紀要第一部A 二四—一

「竹取物語」の成立と外来思想 小川光暘 人文科学 二二

古代叙事文芸の時間と表現—源氏物語における時間意識の講造— 三谷邦明 文学 四二—一

王朝妖艶美の系譜—浄土変相とのかかわり— 川口久雄 金沢大学法文学部論集(文学篇) 二二

公家日記と歴史文学 多賀宗隼 日本歴史三一六

今鏡試論 //

峠の信仰と文学—古代駿河編— 野木寛一 地方史静岡 四

今昔物語撰者は日本靈異記をどのやうに受容しているか 八木毅 愛知県立大学説 二二三

古代日本に於ける近親相姦
禁止の機能と罪の意識構造

宮崎博生 国学院雑誌 七五―一九

倭王旨の擬定と天孫本紀
―七支刀新見―

菟田俊彦 〃 七五―一二

崇神王朝の始祖伝承とその
変遷

吉井 徹 万葉 八六

祥瑞考

福原 栄太郎 ヒストリア 六五

右府藤原宗忠の教養とその
周辺

河野 房男 史学論叢 七

古代の「内」についての
一考察

橋 重孝 金城学院大学論集 五九

中 世

存在の相互連関(中世的
思惟の特徴―一四―)

中村 元 心 二七―一

中世における地方文化

萩原 竜夫 地方史研究 二四―四

室町後期における地方文化
形成の断面

須田 悦生 芸能史研究 四六

一乗谷文化の一側面―京都
文化人と越前朝倉氏との交流
―(付)越前文化史関係年表

水藤 真 一乗谷史学 四

鉢形周辺の戦国文化とその
前段階(中)―
―仏教資本を中心に―

宮内 正勝 埼玉文化史研究 六

釈正徹の和漢兼帯論

永島 福太郎 関西学院史学 一五

北畠親房の儒教思想
―その宋学説について―

我妻 建治 成城大学文学部
創立二十周年記
念論文集

神皇正統記の成立過程と
仏祖統記の影響について

平田 俊春 神道学 八二

『神皇正統記』の「ヒト」と
「モノ」―「童蒙」補考

我妻 建治 成城文芸 六九

中世における日本書紀研究

久保田 収 神道史研究 二二―四

職原^抄諸本の系譜
―思想的考察への序説

加地 宏江 日本歴史 三一七

中世武士道徳思想の形成
―とくに内面的自覚の過程―

渡部 正一 東京教育大学文
学部紀要 九五

浄土思想の成立過程

土居 真後 基督教研究 一八

源信・法然・親鸞

金子 大栄 親鸞教学 二五

聖覚と源空・親鸞

宮崎 円遵 金沢文庫研究 二〇

法然浄土教の思想史的把握と
思想構造
―その方法論的構図―

峰島 旭雄 智山学報 二三・二四

法然浄土教の歴史的 성격に
ついて

田平 暢志 鹿児島短期大学
研究紀要 一三

法然上人における思想の遍歴

大橋 俊雄 親鸞教学 二五

聖覚における信の思想

信楽 峻磨 真宗学 五〇

「摧邪輪」の背景とその性格

坂東 性純 大谷学報 五三

真宗の証果論

寺倉 襄 同朋大学論叢 二九

真宗における往生浄土の目的 — 還相廻向の意義について —	岡 邦 俊	相愛女子大学・ 相愛女子短期大 学研究論集二二二	親鸞と「歎異抄」 — 悪人往生をめぐる —	下 房 俊 一	島根大学文理学 部紀要 八
浄土真宗の仏性論—後編— 親鸞断想	前 田 道 言	竜谷教学 九	歎異抄第二章における親鸞の 世界	稲 田 繁 夫	長崎大学教育学 部人文科学研究 報告 二二三
宗教的生の「考察」 — 親鸞の「他力」をめぐ って	湯 浅 泰 雄	実存主義 六七	時衆と陣僧	山 野 井 杲 瑠	長 野 五 八
親鸞における本願の歷程	市 川 良 哉	奈良大学紀要二	一遍聖の熊野参籠について	石 岡 信 一	東 洋 学 研 究 八
親鸞の証(その二) — 道元との比較において —	石 田 瑞 磨	武蔵野女子大学 紀要 九	一遍の念仏における時	白 木 淑 夫	智 山 学 報 二二三・二四
親鸞における名号観	仁 科 弘	研究紀要(鹿児 島短大) 一二	日蓮上人の方位観	宮 崎 海 優	棲 神 四 六
親鸞における宿業の問題	田ノ倉 亮 爾	大倉山論集一一	身延山初期における日蓮聖人 — 特に建治二年を 中心として —	上 田 本 昌	〃 〃
親鸞聖人の業思想	幡 谷 明	仏教学セミナー 二〇	日蓮聖人の戒壇義と教団の 問題	渡 辺 宝 陽	日 本 仏 教 学 会 年 報 三 九
仏性論上における親鸞の特徴	稲 葉 秀 賢	〃 〃	日蓮における開会の思想と 教団の問題	勝 呂 信 勝	〃 〃
覚如教学の特色	北 畠 典 生	真宗研究 一八	日蓮教団における法難の 問題	上 田 本 昌	〃 〃
「教行信証」の哲学序説	普 賢 晃 寿	真宗学 五〇	扶桑略記に関する一考察 — 日蓮聖人御遺文と 関連して —	小 西 徹 龍	関 西 学 院 史 学 一 五
「教行信証」における真実と 方便	早 島 鐘 正	実存主義 六七	明恵における人間観と教化の 特質	福 沢 行 雄	東 京 教 育 大 学 教 育 学 研 究 集 録 一 三
「教行信証」信巻における 善導教学の受容について	五十嵐 明 宝	武蔵野女子大学 紀要 九	明恵における「信」の思想の 一特質 — 「華嚴信種義聞集記」 を援用して —	木 村 清 孝	金 沢 文 庫 研 究 二〇—一〇
教行信証における「往生」に ついて	矢 田 了 章	真宗研究 一八			
歎異と改邪	寺 川 俊 昭	日本仏教学会年 報 三九			
歎異抄成立についての一試論	山 本 充 朗	日本歴史三二六			

明恵の三宝礼拝信仰について

「三時三宝礼釈」および「自行三時礼功德義」を中心にして

三宅守常 精神科学 一三

鎌倉期南都仏教教団の形成

―西大寺叡尊をめぐる諸問題―

成田良寛 日本仏教学会年報 三九

叡尊と忍性

―中世戒律復興運動の二形態―

和島芳男 史迹と美術 四四―三

中世における臨濟禪と密教

―蘭溪道隆と若訥宏辯

和田悌一 日本大学人文科学研究所研究紀要 一六

諸学山摠持寺と瑩山紹瑾

道元における「有時」の思想

矢島智津子 東洋学研究 八

道元禪の因果業報思想

道元禪師における本証妙修思想の展開

玉村竹二 日本歴史三〇八

―中国曹洞禪伝承の問題をめぐって―

道元禪師における戒律観の展開

東隆真 日本仏教学会年報 三九

道元禪師の修証観

―弁道話に関連して―

光地英学 駒沢大学仏教学部研究紀要二八

永平道元と蘭溪道隆

笠井貞 理想 四八九

鏡島元隆 金沢文庫研究紀要 一一

道元と如浄―「如浄禪師語録」到来を中心に

伊東洋一 文経論叢九―三

禅宗の地方発展と旧仏教

葉貫磨哉 地方史研究 二四―四

曹洞宗地方展開に関する一考察

―大智と肥後国 菊池氏の場合―

広瀬良弘 駒沢史学 二二

後北条氏と宗教

―大徳寺関東竜泉寺派の成立とその展開―

岩崎正純 小田原地方史研究 五

本地垂迹説の日本的経緯

―思想の重層性を課題として―

高橋昊 日大精神文化研究所教育制度研究紀要 六

鎌倉時代の神仏道上

大山公淳 密教文化一〇八

外宮神道教学の展開

―承前―

安津素彦 神道学 七九

伊勢神道神学発生の一基盤

六根清浄大祓の成立について

鎌田純一 宗教研究 四七―二

吉田神道における顕露教の秘伝について

室町中期俗間神道の一例

出村勝明 芸林 二四―四

中世「清祓」考

中村直勝 神道史研究 二二―一

中世の白山信仰

清田義英 日本歴史三一六

長谷寺にみる天神信仰

桜井徳太郎 歴史手帖二―五

遠

日出典 神道史研究 二二―二

関東における天文・陰陽道の
確立について
―「承久の乱」前後―

金沢正大

政治経済史学
九七

鎌倉時代の陰陽道祭

木村進

立正史学 三八

「愚管抄」の怨霊論を
めぐって

大隅和雄

国文学雑誌(藤
女子大) 一六

「海道記」の宗教

石田瑞麿

金沢文庫研究
二〇―四

鎌倉期近江国葛川における
民衆意識
―中世宗教イデオロギーの
一事例―

小野久志

地方史研究
二四―三

中世の抒情歌の一位相
―中世初頭の歌人の時代
意識とその表現及び中
世的意味について―

脇谷英勝

帝塚山大学論集
七

新古今集の編纂意識における
政治的なもの
―天皇歌人群と
権門歌人群について

小林和彦

語学文学 一二

新勅撰集における定家の選歌
意識

家郷隆文

藤女子大学・藤
女子短期大学紀
要第一部 一二

戦記物語における無常観に
ついて

堀内操

中央学院大学論
叢 九―一

太平記の一特質
―特に仏教思想の現れ方に
ついて―

福田秀一

武蔵大学人文学
会雑誌
五四―三・四

沙石集の研究―四
―念仏宗の他宗排斥に
ついて

山下正治

立正大学文学部
論叢 四八

沙石集の研究―五
―地藏信仰について

山下正治

立正大学文学部
論叢 五〇

徒然草の方法

―「白氏文集」受容に
おける

戸谷三都江

学苑 四〇九

世阿弥の伝書における「道」
―道についての一試論

新川哲雄

学習院大学文学
部研究年報二〇

世阿弥の見所同心について
―実存的共感の芸術

新開長英

九州産業大学教
養部紀要二―一

世阿弥芸術論における物真
似芸の形成
―「風姿花伝」から
―「拾玉得花」への過程

西一祥

語文 三九

横川景三の人と作品
―東山時代漢文学の
一断面

蔭木英雄

相愛女子大学相
愛女子短期大学
研究論集 二―一

土佐の国人大平氏とその文芸
―室町文化荷担者の一相―

下村效

日本歴史三一五

十二世紀末の美と思想
―地獄草紙―

笠原伸夫

文学 四二―三

戦国動乱下の造像
―下総国三崎荘長禪寺
愛染明王像を中心に

小笠原長和

史観 八八

我国中世武家法における法
構造(上)
―法感情として現われた
―「道理」と「不道理非」
を中心に―

辻本弘明

史朋 九

戦国期における領主裁判権の
特質
―相良氏法度を中心に―

西村圭子

熊本史学 四四

歴史物語と歴史

—上横手雅敬氏「平家物語の虚構と真実」に因んで— 多賀宗隼 文学 四二—五

石田充之著 「親鸞教学の基礎的研究」 谷本信之 真宗学 四九

岡本彦一著 「心敬の世界」 両角倉一 論究日本文学 三八

近世

近世武家の生命観 —「三河物語」の場合— 佐藤正英 国文学解釈と鑑賞 四〇—一

「外なるもの」への意識 —鎖国初期における日本人の海外知識の系譜— 尾原悟 ソフィア 二三—二

徳川前半期における実学と 経理的合理主義 —一つの試論— 源了圓 史艸 一五

日本の近代化と実学 —日本における実学運動の展開— 1— 〃 二七—九

日本における実学運動の系譜 —2、3— 実学とは何か 〃 心 二七—二

日本における実学研究の現状 —1— 〃 〃 二八—一

国学史寸感 伊東多三郎 日本歴史三一—三

近世における文明思想の形成 銅直勇 明星大学研究紀要(人文学部) 一〇

徳川時代知識人の学問論とその思想 —とくに儒者を中心として— 芳賀登 大阪教育大学紀要 二二—二

寛文異学の禁

—その林門興隆との関係— 和島芳男 大手前女子大学論集 八

具原益軒先生をめぐって 山崎道夫 斯文七五・七六

「具原益軒」伝補遺 井上忠 日本歴史三一—八

具原益軒の学問と方法 —「大和本草」における儒学と科学— 辻哲夫 思想 六〇—五

具原益軒の儒学と実学 岡田武彦 文理論集 一五—一

蕃山の学に占める神道思想の位置 牛尾春夫 広島大学教育学部紀要(第一部) 二二—二

熊沢蕃山試論 宮崎道生 岡山大学法文学部学術紀要三五(史学編) 二—二

知の性格について —蕃山学の場合— 牛尾春夫 広島大学教育学部紀要(第二部) 二—三

山鹿素行の社会経済思想 (承前) 多田顕 研究報告(千葉大教養部) 四—七

熊沢蕃山と新井白石 宮崎道生 日本歴史三〇—八

新井白石 〃 〃 三二—〇

仁斎学の原像 —京都町衆における惣町結合の思想形態— 三宅正彦 史林 五七—四

日本の思想家としての徂徠 吉川幸次郎 世界 三五—〇

徂徠学派における「老子」受容—上— 野口武彦 文学四二—一〇

徂徠学派における「老子」
受容—下—

野口武彦

文学四二—一

近世後期政治思想の特質
—「徂徠学」と
その後の展開—

相良英輔

史学研究一二〇

服部南郭 —下—

日野竜夫

女子大文学(国
文篇) 二五

佐久間象山の医学

服部敏良

芸林 二五—一

林鶴梁とその著述(一)

篠木弘明

群馬文化一五七

古医方と国学
—国学の成立の基盤

佐野正巳

人文研究(神奈
川大学 人文学
会) 六〇

荷田春満の境涯と志向

三枝康高

静岡大学教育学
部研究報告(人
文・社会科学
編) 二四

創学校啓文の研究
—成立と奉上一

原田常生

神道史研究二二

荷田春満の神典研究と神道説

三木正太郎

皇学館大学紀要
一二

「道」と「雅び」(二)
—宣長学と「歌学」派国
学の政治思想史的研究—

渡辺浩

国家学会雑誌
八七—一一・一
二

宣長と尚賢

比岡四良

皇学館大学紀要
一二

宣長学の思惟構造の特質
—上田秋成一日の神論争—
とのかかわりを通して

小椋嶺一

大谷女子大学紀
要 八

「不尽言」から「排蘆小船」
—人情論を中心に

城福勇

香川大学教育学
部研究報告(第
一部) 三七

本居宣長の医術と環境

松島博

三重大学教育学
部研究紀要
二五—二

本居宣長「後撰集詞のつかね
緒」考
—稿本と刊本との関係—

杉谷寿郎

商学集志(日本
大学商学部創
立70周年特集号)
四四—二・三・
四

初期宣長学の一考察
—特に堀景山と本居
宣長の関係をめぐって—

岡田千昭

九州史学 五五

二つの生死観
—宣長・篤胤に見る人間の
生死への構え

松本滋

聖心女子大学論
叢 四三

上河宗義とその「商人夜話
章」その他
—堵庵研究への序章

柴田實

東西文化史論叢

富永仲基論「翁の文」を
めぐって

梅谷文夫

国語と国文学
五一—一〇

富永仲基の所謂「五類」に
ついて

〃

言語文化 一〇

三浦梅園の学問観と方法論

木村俊夫

茨城大学教育学
部紀要 二三

梅園の論理構造について

三箇文夫

精神科学 一三

三浦梅園における教育と
政治の論理

橋尾四郎

福島大学教育学
部論集二六—三

我が国における近代思惟の
黎明
—瀬戸内学派と
近代思惟の東漸—

高橋正和

日本史研究
一四四

安藤昌益と門人たち

—その集団の性格に関する
試論

萱沼紀子

国語国文研究
五一

安藤昌益論

—昌益に於ける△制度▽と
△自然▽

今宿純男

歴史研究 一〇

安藤昌益の農本的国家論

—そのユートピア思想を
通して見たその萌芽性—

新谷正道

史学研究
一一・一二

『曆象新書』および志筑

忠雄の研究史(四) 日本史家
による評価について(二) —

大森実

法政史学 二六

和算の伝統と洋算の受容

—「塵劫記」から
「数学三千題」へ—

小林重章

東京大学教育学
部紀要 一三

鷹見泉石の蘭学攻究

蘭学における実理と実用
—杉田玄白の医学思想を
中心にして

片桐一男

大倉山論集 一一

横井小楠の学問と思想

横井小楠の西洋理解と
「三代の道」

前野喜代治

国士館大学人文
学会紀要 六

士道論の成立とその展開に
ついて

後藤広子

日本精神文化研
究所教育制度研
究所紀要 六

義理再説

白方勝

愛媛大学教育学
部紀要第二部人
文・社会科学部
七

近世日本における「家」
道徳について
—庶民を中心として

尾形利雄

上智大学教育学
心理学論集 八

近世地方商人の生活倫理と
教育観
—「夜職草」の世界

入江宏

宇都宮大学教育
学部紀要第一部
二四

元禄享保期町人倫理の考察—
西鶴以降の浮世草子を
中心として

島崎隆夫

三田学会雑誌
六七—六

天保期のある少年と少女の
教養形成過程の研究(9)
—橘守部の日々(天保七年)

高井浩

群馬大学教育学
部紀要(人文・
社会科学編)
二三

江戸期書店の発生动向
—増訂慶長以来書買集
覧」の集計

森田誠吾

文学 四二—九

近世における地方出版に
ついて
—常陸の場合—

秋山高志

地方史研究
二四—四

高松藩学講道館の新建大聖
廟祀について

藤川正数

香川大教育学部
研究報告 三七

幕藩制確立期に於ける
岡山藩文教政策

大森映子

史艸 一五

尾張藩における武教育の
伝統と改革

高木靖文

徳川林政史研究
所研究紀要昭和
四八年度

水戸藩における私塾の実態

鈴木暎一

茨城県史研究
二八

天保期熊本藩政と初期実学党

鎌田浩

熊本史学 四三

加賀藩政期の社会教育 ―特に「婦人養草」に現 われた道德思想について	橋本芳契	日本海域研究所 報告(金沢大) 六
豊後学の門流とその近代 教育への影響(一)	鹿毛基生	大分大学教育学 部研究紀要(教 育) 四―四
江戸時代の民衆教育とその 思想 ―「余力学文」の教育 思想をめぐって―	高橋敏	史潮 一―三
キリシタン史研究上の問題点 切支丹の時代と殉教の理念 ―1―	今村義孝 上原袈裟美	秋田史学 二― 四国学院大学論 集 二―八
日本におけるキリスト教 受容の前提的研究視点 初期のキリシタン版 ―キリシタン版書誌―1―	海老沢有道	キリスト教史学 二―八 史苑 三四―一
不干斎フアビアン「妙貞問答」 上巻「禅宗之事」について	井手勝美	史学研究 一―二・二
慶長禁教令について	松本史斎	駒沢大学史学論 集 三
キリシタン禁令をめぐって	三鬼清一郎	日本歴史三〇八
小田原領の新田村(1) ―ころびキリシタン奥住 新左衛門と竈新田の成立―	内田哲夫	小田原地方史研 究 六
本院所蔵キリシタン史料に ついて(補修篇)	大類伸	日本学士院紀要 三一―三
皇大神宮別宮伊雑宮謀計 事件の真相 ―偽書成立の原因について―	岩田貞雄	国学院大学日本 文化研究所紀要 三三

金地院崇伝と銘文	天岸正男	史迹と美術 四四―七
紫衣事件と沢庵宗彰	船岡誠	駿台史学 三四
江戸初期の排仏論	高神信也	印度学仏教学研 究 二―二
鈴木正三における密教的 なるもの	藤吉慈海	要 禅文化研究所紀 六
近世寺檀制度の成立について ―民衆支配とその成立 ― 基盤を中心として―	西脇修	要 仏教史研究 七
師蛮の本朝高僧伝について	荻須純道	要 禅文化研究所紀 六
近世の飯沼觀音と庶民信仰 ―開帳と本堂再建勘化を とおしてみたる	長谷川匡俊	要 淑徳大研究紀要 八
かくし念仏の研究	山崎教信	真宗学 五〇
江戸後期における「教行信 証」について ―特に「化身土巻」を 中心として	上場顕雄	〃 一八
両部神道家源慶安の地球説 支持と仏教界の反応	海野一隆	科学史研究 一一二
伯家神道と平田篤胤 ―「神祇伯家学則」の作者 及びその成立時期につ いて―	小林裕八	皇学館論叢 七―六
幕末維新期の黒住教 ―赤木忠春と本多応之助	ひろたまさき	岡山大学法文学 部学術紀要三五 (史学編)
西垣晴次著「ええじゃないか ―民衆運動の系譜」	高木俊輔	歴史評論二八六

「おかげまいり、ええじゃないか」考 鎌田道隆 芸能史研究四三

水戸藩の撞鐘収政策 圭室文雄 明治大学教養論叢 八六

近世武士の死生観 久保田芳太郎 国文学解釈と鑑賞 四〇―一

日本文学史序説 第六章・第七章・第八章 加藤周一 朝日ジャーナル 一六―四―二六

近世伊勢地方芸能史の研究 ―神宮文庫所蔵小川地家狂言関係資料をめぐって 桜井ふさ 皇学館論叢 七―六

心敬と宗祇 ―その連歌美の構成― 池田重 千葉大学教育学部研究紀要二三 第一部

初心と無心 (世阿弥芸論序説) 藤井和義 神戸学院大学紀要 四

浅井了意ノート―1の上― ―鈴木正三とのかわりをめぐって 坂巻甲太 国文学研究五二

浅井了意ノート ―鈴木正三とのかわりをめぐって―1の下― 〃 五三

「曾根崎心中」の悲劇性 川崎勇 日本文芸研究 二六―四

近松浄瑠璃の思想 ―1― 藤原暹 ノートルダム清心女子大学国文科紀要 七

「長者教」から「日本永代蔵」へ ―家意識を中心に― 〃 〃

江戸蕉門と「莊子」 史論としての不易流行論 ―去来における芭蕉と芭蕉以前― 乾裕幸 国語と国文学 五一―三

蕪村の時間性 中野沙恵 言語と文芸七七

上田秋成 ―二―七― 岩橋小弥太 国学院雑誌 七五―一・五・七 八・九・一〇

「雨月物語」 ―その闇と光― 青木正次 藤女子大学藤女子短期大学紀要 第一部 一二

行為としての絵画―8― 大西広 美術手帖 三八四

領域―2― 本居宣長の「江戸絵」評(断章) 小林秀雄 新潮七一―三・五・七・九・一二

本居宣長 松下道夫 日本文学 二三―二

平賀源内私論 難波信雄 東北学院大学論集歴史・地理四

幕藩制社会における「イデオロギー」状況の一素描 ―支配思想と民衆意識をめぐって― 林基 専修史学 六

近世民衆の社会・政治思想 研究の史的基礎(一) 小林慧子 論究・日本文学 三八

太田牛一「信長公記」における信長像 北島正元 国史学 九四

徳川家康の神格化について 「將軍権力」の創出―3― 朝尾直弘 歴史評論二九三

ソテロと伊達政宗	松平年一	日本歴史三一七	主体・天理・天帝(二)	平石直昭	社会科学研究 二五―六
家光時代の経済生活と儉約思想	安藤良平	跡見学園女子大学紀要 七	攘夷思想の変化 ―海江田信義の場合―	海江田進	英学史研究 六
文政・天保期における民衆意識	谷口尚志	立命館文学 三五〇・三五一	幕末における「小藩」の改革視点	守屋嘉美	東北学院大論集 歴史・地理 四
本多利明の国際社会観 ―幕藩期における主権平等意識―	筒井若水	社会科学紀要 一三三	大國隆正と革運論について ―その歴史観の一考察― 外国人のみた幕末志士観について	荒川久寿男	皇学館論叢 七一―
海保青陵の経済論形成と各地遊歴	蔵並省自	日本大学文学部研究年報 二二	―特に R. J. Sterwson のみた吉田松陰観を中心に―	大塚英明	史叢 一七
二宮尊徳と大原幽学	土屋重隆	経済集志 四四―三・四・別(合併)	江戸幕府の抜荷取締令をめぐる法意識の変遷	西村圭子	日本女子大学紀要文学部 二三
二宮金次郎の仕法に関する一考察 ―相馬藩の場合を中心に―	熊川由美子	人文論集(静大 文学部) 二五	幕藩制解体期における農民闘争の思想的基盤 ―盛岡三閉伊通百姓一揆を中心―	浅貝隆	民衆史研究 一二
豪農地主の経済と思想の二形態	庄司吉之助	東北経済 五五・五六	「皮多」の抵抗意識ノート	前圭人	兵庫史学 六五
梅岩と蟠桃の商業論	竹林庄太郎	関西大学商学論 集一九―三・四	ホール・ジャンセン編「徳川社会と近代化」	辻達也	経済セミナー 二二七
藤田幽谷の「力役論」に関する一論	大淵利男	法学紀要 一五	布川清司著『近世日本の民衆倫理思想』	倉地克直	日本史研究 一四五
「幕末経世論」―横井小楠・開国論― 3―	山崎益吉	高崎経済大学論 集 一七一―一	西垣晴次著『ええじゃないか―民衆運動の系譜―』	高木俊輔	歴史評論 二八六
幕末経世論―横井小楠・政治論― 4―	〃	〃 一七―二	宮崎道生著「新井白石の洋学と海外知識」	伊東多三郎	史学雑誌 八三―三
小楠における開国	高橋康昌	群馬大学教養部 紀要 八			
主体・天理・天帝(一) ―横井小楠の政治思想―	平石直昭	社会科学研究 二五―五			

近代

近代日本社会思想の形成過程	羽倉一雄	大分大学経済論集 二六―五	「福沢屋論吉」の発展・転換過程 ―明治前期出版文化史の一断面	長尾政憲	法政史学 二六
日本のナショナリズムと教育	鹿野政直	思想 五九八	「西国立志編」と「其粉色陶器交易」の周辺 ―明治初期における西欧文化受容の一面について	平岩昭三	日本大学芸術学部学術研究 三
日本人のキリスト教受容 ―武士道との接触	大内三郎	日本文化研究所研究報告(東北大) 一〇〇	一つの兆民像 ―日本における近代的世 界観の形成	宮城公子	日本史研究 一四三
明治時代におけるスペンサーの受容	山下重一	国学院法学 一二―一	西周 ―啓蒙期の理論― 中江兆民 ―啓蒙期の理論―	吉田精一	国文学解釈と観賞 三九―二
明治期に於ける往来物について	木野主計	図書館学会年報 二〇―二	西周に於ける儒教と洋学 ―明治啓蒙思想の構造分析	吉田精一	国文学解釈と鑑賞 三九―三
近代外国教育思想の受容 ―ペスタロッチ教育思想について	西脇英逸	人文論究(関西学院大) 二二―四	明治中期の思想的課題(一) ―井上哲次郎と大西祝	渡辺和靖	哲学と教育 二二
明治の近代軍隊と学校教育	太田卓	国学院大学紀要 十二	大西祝「良心起源論」の倫理思想的考察	熊田健二	日本文化研究所研究報告(東北大) 一〇
日本知識人の北米体験 ―日米比較文化への一視角	広岡実	桃山学院大学人文科学研究 九―一	田岡嶺雲とその時代 ―明治知識人の軌跡― (上)	菅井鳳展	秋田大学教育学部研究紀要(人文・社会科学) 二四
明治「啓蒙」の学問・教育思想	堀尾輝久	科学と思想 十四	明治期日本人の自然観 ―志賀重昂の場合―	宇喜田敬介	愛泉女子短期大学学紀要 九
森有礼とホーレス・マン ―庶民教育と教師養成について―前篇―	秋枝肅子	文芸と思想 三八	柳田国男とハイネの「緒神流竄記」	柴田實	同志社女子大学学術研究年報 二五―一
四家論 ―福沢諭吉・西村茂樹・内村鑑三・夏目漱石―	高橋正夫	心 二七―一			日本民俗学 九四

柳田国男の祖先崇拜観	網沢満昭	近畿大学教養部 研究紀要 六一一	グリフィスの福井滞在日記 から — 明新館での教育内容に ついて	山下英一	英学史研究 七
哲学者の神 — 西田幾多郎を中心に —	松村克己	神学研究 二二二	明治初期におけるフレレーベ ル教育思想の受容形態 教育における「私」の原理 と「社会」の原理 — 公教育についての思想 史的再吟味 — 中 —	浦田利子	東京女子大学論 集 二四—二
西田哲学の「行為的直観」 と田辺哲学 — 社会思想をめぐって	山本誠作	人文（京大教養 部） 二〇〇	日本近代公教育における 「学問のすすめ」初編の教 育史的意義について — 「学制」（一八七二年） との関連において	奥平康照	人文研究（大阪 市立大） 二六一—九
西田哲学に所謂「私と汝」 について — 「現実の世界の論理的 構造」を中心として	野口恒樹	皇学館論叢 七一五	森有礼とわが国近代商業教 育の創成	佐伯友弘	九州大学教育学 部紀要 十九
西田幾多郎の思索 — 文芸と哲学との間に （四高教授時代）	大久保純一郎	心 二八一—	徳富蘇峰の自由主義教育論 と大江義塾	田中昭徳	商学討究 二五
「善の研究」の背景	杉本新平	富山大学教養部 紀要 六	教育勅語衍義書の教育史的 一考察 — 明治二十年代の場合	生馬寛信	広島大学教育学 部紀要 一一—二二
西田哲学批判のゆくえ二 — 弁証法の諸問題と宗教	西村恵信	禅文化研究所紀 要 六	教育行政に示される天皇制 像	山本哲生	日大精神文化研 究所教育制度研 究所紀要 六
高島素之における第二の旋 回	有馬学	季刊社会思想 三一三・四	帝国主義形成期浮田和民の 教育論 — 忠孝道德批判から立憲 的道德へ	家永三郎	現代と思想 十五
大正初期の教養派の一分析 — とくに初期の和辻哲郎 氏を中心として	荒川久寿男	大倉山論集 十一	明治後期における教職意識 の展開	花井信	教育学研究 四一—一
私説河上肇 — 英学史の視点から	帆足函南次	英学史研究 七	大正期「教育の自由」思想 の一考察 — 志恒寛の場合を中心に	寺崎昌男	立教大学教育学 部研究年報十七
日本におけるマルクス主義 科学史の成立 — 一九三〇年代の岡邦雄 を中心	大沼正則	科学と思想 十四		伊津野朋弘	北海道教育大学 紀要 二四—一
皇学所への献本について	野田秀雄	仏教文化研究 二〇〇			

上田自由大学の成立とその経過

山野晴雄

歴史手帖 二一七

公共社
—長屋忠明のことなど

島津豊幸

〃 二一六

喜田貞吉の「歴史教育」応用史学論の性格とその歴史的位置
—歴史観・歴史研究・歴史教育

田中史郎

岡山大学教育学部研究集録 三九

谷本富の教育思想—
—その「国民教科」観を中心に

影山清四郎

大阪音楽大学研究紀要 十二

森信三の日本の正気の心実学と教育的実践

山県三千雄

人文論集(早大法学会) 十一

近代日本の教化政策と「修養」概念
—蓮沼門三の「修養団」活動

村松憲一

社会科学討究 十九—一

近代真宗布教教学史
—明治期

小室裕充

智山学報 二三・二四

道明寺神仏分離考

野田秀雄

仏教史研究十一

明治初年における山口県の廃仏毀釈
—「山口県風土誌」よりみたる—

村田安穂

早大教育学部学術研究 二三

初期日本バプテストの宣教記録
—ネーザン・ブラウンの Pastor's Record (1872)

佐々木敏郎・訳・註

六浦論叢 十

明治前期の品川教会
—一・二—

工藤英一

経済論集(明治学院大) 二〇

明治国家と宗教
—井上毅の宗教観・宗教政策の分析

中島三千男

歴史学研究 四一三

内村鑑三における「日本」

渋川久子

日大精神文化研究所教育制度研究紀要 十一

内村鑑三とアメリカ
—反米主義の心理構造について—

平川祐弘

教養学科紀要(芸大) 六

内村鑑三と社会主義

神沢惣一郎

早稲田商学 二四七

内村鑑三の世界観と Shakespeare の人間観
—内村鑑三の信仰と思想よりみた Hamlet, Othello, King Lear 論—

前田利雄

札幌大学外国語学部紀要(文化と言語) 七一

宗教と平和
—内村鑑三の非戦思想

宮田輝夫

理想 四九〇

「宮崎湖処子日記」と「昇天の福音の由来」

井上忠

福岡大学人文論叢 六一—

明治後期の仏教社会思想

鈴木美南子

フェリス学院大学紀要 九

伊東友賢伝
—プロテスタント受洗した最初の東北人の伝記—

伊東信雄

東北文化研究所紀要(東北学院大) 六

青森県におけるキリスト教の社会的経済的考察
—明治初期の弘前メンジスト教会史を中心として

内海健寿

会津短大報 三一

英学・キリスト教と自由民権
—東北の場合

池田哲郎

福大史学 十九

山村におけるキリスト教の 受容―二―	泉 琉 二	三重大学教育学部 研究紀要 二五―三	文学研究における「近代主義」的意識構造の問題	近藤 潤 一	日本文学 二二―二
日本におけるカルバン ―高倉徳太郎の場合	久 米 あつみ	東京女子大学附 属比較文化研究 所紀要 三五	北村透谷の人生と文学 △戦いの人△の暗渠 ―透谷像のアポリア	形 岡 瑛	〃 二二―一
永田方正略伝 ―聖書和訳の先覚者	木 下 清	史泉 四八	愛山再評価のことなど ―続・透谷像のアポリア	北 川 透	文学 四二―七
清沢満之の主題と方法 ―未完―	山 雲 路暢良	金沢大学教育学部 紀要 二三	島崎藤村の思想の展開 ―近代の運命	吉 村 善 夫	〃 四二―九
多分に誤伝評価されつつあ る大正期信州白樺教育の実 態	一 志 茂 樹	信濃 二六―五	明治二十年代の徳富蘆花 ―その文筆活動の素描	吉 田 正 信	信州大学教養部 紀要(人文科学) 八
大正期における倫理宗教思 想の展開―二― ―桑木殿翼の文化主義哲 学	峰 島 旭 雄	早稲田商学 二四四	蘆花徳富健次郎―二五― 国木田独歩論―二― ―徳富蘇峰と独歩	中 野 好 夫	展望 一八二
アジアの革新におけるキリ スト教 ―孫文と宮崎滔天	武 田 清 子	国際基督教大学 学報(教育研究) 十七	日露戦争と女性詩人 正岡子規とナショナリズム ・その三 ―鑑三、樗牛、子規と日 蓮	鈴 木 秀 子	聖心女子大学論 叢 四四
一九三〇年代における日本 基督教会の活動―一―	土 肥 昭 夫	キリスト教社会 問題研究 二二	志賀直哉とキリスト教 ―内村鑑三との関係を中 心として	小 西 四 郎	日本歴史三一六
矢内原忠雄・伊作父子	笠 原 芳 充	現代の眼 十五	大杉栄の「近代思想」(日 本文壇史―二三―)	中 野 一 夫	跡見学園国語科 紀要 二二
長野県下におけるキリスト 教会解散 ―太平洋戦争下の宗教弾 圧の一側面	塩 入 隆	長野 五七	啓蒙期の社会思想	菊 田 茂 男	東北大学文学部 研究年報 二三
日本の伝統的抒情性とキリ スト教 ―永井魚い子をめぐって	永 藤 武	国学院大学日本 文化研究所紀要 三四	資本主義的發展と天皇制イ デオロギー	瀨 沼 茂 樹	群像 二九―三

日本思想史における市民権意識の系譜

—教育権を中心として—
—未完—

堀江宗生

東海大学紀要
(教養学部) 五

非武装平和思想の歴史的考察
—序説—

松永昌三

研究紀要(都留文大) 十

近代における日本人の対朝鮮連帯意識の限界と優越感の成立

吉田宗茂

社会文化史学十

大政奉還運動の展開過程

井上勲

学習院大学文学部研究年報二〇

王政復古期における天皇観

坂田吉雄

産大法学 十一

変革期における一豪農の思想と行動

沼田哲

文経論叢 九

—木曾馬籠・島崎正樹の場合—

報徳運動と自力更生

—岡田良一郎と片平信明を中心として—

芳賀登

歴史研究 十

佐藤昌介の「大農論」とその背景

矢島武

経済論集(北海道学園大) 二一—四

実学的農学者横井時敬の前半生をめぐる人々

須々田黎吉

農村研究 三八

—明治農法形成における農学者と老農の交流—
—六一—

明治時代のわが国防概念について

山中松男

防衛大学校紀要 二九

明治初年における木戸孝充の征韓論

荒川久寿男

皇学館大学紀要 十二

—その非征韓への推移について—

西郷隆盛の「征韓論」について

近松鴻二

鹿大史学 二二

「文明論之概略」にいたる「風俗」の思想について

田中明

三田学会雑誌 六七—六

—九山思想史学の批判的再検討—

加藤弘之のコンミニズム論

吉田昶二

史朋 九

百姓一揆と自由民権運動

—小室信介編—東洋民権百家伝」の場合

深谷克己

民衆史研究会会報 三

「自由新聞」にみる自由党の国家独立構想

高橋正幸

桐朋学報 二三

自由民権運動の興隆から挫折まで

岩崎孝和

駒沢大学史学論集 三

—豪農層の動向を中心として—

紀北地方における自由民権運動

増田毅

和歌山県史研究 二

民権運動と士族

—上毛自由党論—

稲田雅洋

一橋論叢 七一—六

自由民権派の琉球論

比屋根照夫

琉大法学 十五

群馬事件とその背景

稲田雅洋

歴史学研究 四〇—五

中江兆民の思想形成と儒教的要素

藤野雅己

上智史学 十九

田口卯吉の政治思想—上—

伊藤弥彦

同志社法学二六

所謂大隈主義

梁啓超・細野浩二 訳註

早稲田大学史紀要 VII

アジア侵略論と日清戦争

中村尚美

社会科学討究 十九—一

「国民之友」に現われた民
友社の社会・政治思想

Person, John D.

人文科学

二一三

明治の社会主義

—明治初期における社会
主義思想の影響—二一

飯田 鼎

三田学会雑誌
六七—二・三

幸徳秋水の非戦思想

磯村 寛治

龍谷史壇
六八・六九

アナキスト幸徳秋水の革命
思想

大田 正昭

駒沢大学史学論
集 三

明治社会主義と知識人

浜口 晴彦

社会科学討究
十九—二

日露戦争と社会主義者の立
場

村岡 陽一

歴史評論
二九〇

—和田春樹著「ニコライ
・ラッセル」の問題提
起に関連して—下—

大陸政策における若干の問
題

大竹 慎一

一橋研究 二七

「朝鮮併合」と日本の世論

平田 賢一

史林 五七—三

宮崎滔天における「支那革
命主義」の確立

三木 民夫

民衆史研究
十二

—「暹羅殖民」活動を中
心に

大杉 栄

森山 重雄

文学 四二—六

—エロスのアナキズム

「冬の時代」への反撃
—大杉栄と「近代思想」

高木 近明

社会運動史 四

明治・大正デモクラシーの
一系譜
—蔵原惟郭とその思想
—一—

桜井 純一

現代と思想
十八

二つの大正デモクラシー論
—その今日の意味

尾城 太郎丸

三田学会雑誌
六七—十二

地方における大正デモクラ
シーの成立とその変貌
—兵庫東北播、西脇地方
における場合

安達 正明

兵庫史学 六〇

大正期における「生活改善
運動」

中 鷹 邦

史艸 十五

若き日の仁科雄一とその周
辺(上)
—日農創立の思想史的意
義によせて

岩村 登志夫

日本史研究
一四四

浮田和民博士の国家論(七)

池田 美代二

早大学術研究
二二三

高島素之と国家社会主義派
の動向
—大正中期社会運動の一
面

有 馬 学

史学雑誌
八三—十

婦人解放史における民主主
義の課題(二)
—治安警察法修正運動の
意義によせて

米田 佐代子

人文学報(都立
大)
九七

婦選獲得同盟の成立と展開
—「満州事変」勃発まで

鹿野 政直

日本歴史
三一九

地方主義運動と民俗研究
—福土幸次郎の仕事につ
いて

阿部 猛

地方史研究
二四—一

地方主義を排した日本近代
—超国家主義の由来

三輪 公忠

上智大学外国語
学部紀要 八

北一輝論(二)

地方議会におけるファシズム論争

一九三四(昭和九)年熊本県会から

大陸浪人のみる満州問題・日中戦争

宇佐穩来彦の書簡を中心に

植民地ファシズム運動の成立と展開

満州青年連盟と満州協和党

農本イデオロギー覚え書

昭和恐慌期を中心に「労農派」理論に関する一考察

福本イズム克服の過程(一九二七年)

猪俣津南雄の農業論・戦略論

日本帝国主義をめぐる論争の一齣

転向史と歴史意識

「日本人論」的視角からみた大東亜戦争

山本信良・今野敏彦著「近代教育の天皇制イデオロギ

古屋哲夫

上河一之

新藤 東洋男

岡部 政夫

牧野 尚信

小林 正敏

斎藤 勇

大島 清

小島 恒久

後藤 宏行

中村 菊男

籠谷 次郎

人文学報 (京大) 三八

近代熊本 十五

〃

歴史学研究 四〇六

秋田近代史研究 十八

法学論集(駒沢大法学会) 十一

人文学報(京大) 十九

思想 五九五・五九六

社会科学論集 十四

名古屋学院大論集人文自然科学 十一

軍事史学 十三

日本史研究 一四四

透谷年譜追加・訂正

元田永孚自叙伝解題

穂積八束伝ノート

湯浅泰雄編「人と思想 和辻哲郎」を讀んで

松沢弘陽著「日本主義の思想」

小松隆二「日本アナキズム運動史」

シャイブリー編「日本文化における伝統と近代化」

「四」エドワードサイデNSTEITツカー「小林秀雄論」

林竹二著「田中正造」その生と戦いの「根本義」

川崎 司

花立 三郎

長尾 龍一

矢島 羊吉

高橋 彦博

大沢 正道

秋山 勇造

小松 隆二

日本文学 二二二

近代熊本 十六

社会科学紀要 二二三

実存主義 六八

社会労働研究 二〇一・三四

歴史学研究 四二二

人文研究 (神奈川大学人文学会) 五九

三田学会雑誌 六九

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳端をけがすことになった。

本専攻の学部(第三・四年)は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院(修士・博士課程)は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史(国史)専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究 第九号

昭和五十二年三月二十五日 印刷
昭和五十二年三月三十日 発行

編集代表者 石田一良

仙台市原町四丁目九ノ十四

印刷所 合名 共同印刷所

仙台市川内

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室

